

MAXX!!! 鳥人死闘篇

2006(平成18)年8月26日鑑賞(ホクテンザ1)



監督・脚本=ジュリアン・セリ/出演=チョウ・ベル・ディン/ロラン・ピエモンテージ/シャルル・ペリエール/ウィリアムス・ベル/エロディ・ユング/パート・クウォーク/サンティ・スダロ (ギャガ・コミュニケーションズ、シナジー配給/2004年フランス映画/94分)

第3章

実際にやったらアカンで！

……高層ビルをよじ登り、ビルからビルへと飛び移る「YAMAKASI」たちを主人公にした、フランス映画には珍しい大衆向け娯楽作品だが、さてその出来は……？ 少年時代から鍛えあげたその技のすばらしさは感嘆モノだが、チャイニーズマフィア VS 日本人ヤクザの抗争という設定は、いかにも陳腐……？ しかして、クライマックスにおける日本刀を振り回しての全面戦争と、「YAMAKASI」たちの格闘技は、もうハチャメチャ……？ さて、これで日頃の鬱憤晴らしはできるかな……？

これは一体何の映画……？

この『MAXX!!! 鳥人死闘篇』は大阪ではホクテンザ1の上映だが、前評判を示す新聞記事もなく、タイトルだけでは何の映画かサッパリわからない。まず第1に、これは「YAMAKASI」映画。したがって、「YAMAKASI」とは何かということに一定の知識を持っているか、何らかの興味を持っている人でなければ、まず観に行かないはず。

そして第2に、これはフランス映画には珍しく「大衆娯楽」映画。すなわち、正統派「YAMAKASI」の特技をメインとしながら、タイのバンコクを舞台とし、中国マフィアと日本ヤクザさらにストリートギャングたちが入り乱れた、一種のドタバタ劇……？

そんなワケで必然的に登場人物が多くなるが、「YAMAKASI」のメンバーを含

めた登場人物たちの人種構成がさまざまであるうえ、ハーフも多いから、日本人観客には名前と顔がなかなか一致しないので大変。

したがって、鑑賞後はパンフレットを購入して、ストーリーと登場人物を復習することが不可欠……？

「YAMAKASI」とは……？

パンフレットによれば、「YAMAKASI」とはあるグループの名称で、コンゴのリンガラ語で超人という意味。そのメンバーは猛トレーニングを積んだ少年時代からの親友グループ。

その「YAMAKASI」がはじめて映画に登場したのは、リュック・ベッソン監督が製作した『TAXI 2』（00年）。そしてそれに続く映画『YAMAKASI』（01年）では、そのタイトルどおり彼らが主演として登場することに。「YAMAKASI」の特技は、超高層ビルをスイスイとよじ登ったり、ビルからビルへ軽々と飛び移ること。スクリーン上で見せた彼らのこの特技が観客の度肝を抜き、注目されたのは当然だった。

そこで、映画『YAMAKASI』の脚本を書き、アクション監督を兼任していたジュリアン・セリが再度彼らを主演として起用し、監督したのがこの『MAXX!!! 鳥人死闘篇』。

そして、「YAMAKASI」メンバーのリーダー的存在であるシャルル・ペリエールが映画『YAMAKASI』と同様に原案を出し、脚本も担当しているとのこと。そこでパンフレットにも紹介されているが、この映画を理解するためにどうしても必要な「YAMAKASI」のメンバー紹介を、この『MAXX!!! 鳥人死闘篇』における役割紹介を兼ねてやっておこう。

「YAMAKASI」のメンバー紹介を……

第1に、主要メンバーを紹介すれば次のとおり。ちなみに、番号はパンフレットでの紹介番号。

①キエン（チョウ・ベル・ディン）は、今回は「YAMAKASI」のメンバーから外れ、チャイニーズ系ストリートギャング団のボスとして、さまざまな複雑な役

割を……。

⑧キエンの妹、ツ（エロディ・ユング）は兄と一緒に活動していたが、途中兄と袂を分かつことも。しかし最後には……？ また、ローガン（シャルル・ベリエール）との恋においては自らキスを仕掛けるなど積極的……？

③ローガンは「YAMAKASI」メンバーのリーダー的存在。否応なく抗争に巻き込まれる中、いったん死亡した（かに見える）が……？ また、なぜかつと恋におちていくところがミソ……？

②レオ（ロラン・ピエモンテージ）はバンコクでジムを開くという計画を立て、数人のメンバーとともにそれを実現したが……。

⑥ウィリアムス（ウィリアムス・ベル）は祖父から「生命の神秘」に関する教えを受け継ぐという風変わった神秘的な雰囲気を持ち、ローガンの再生に大きな役割を……。

第2に、今回はその他大勢となるメンバーは次のとおり。

④ヤギー（ギレン・ヌグバ・ボイエケ）

⑤ケンジー（マリク・ディウフ）

⑦ヤン（ヤン・ノウトゥラ）

チャイニーズマフィアと日本人ヤクザ

ジュリアン・セリ監督が「YAMAKASI」のメンバーを、ジム経営のためにバンコクに行くローガン、レオたちと、ストリートギャングのキエン、ツたちに分けたのは、対立構造の物語とするためだが、それをさらに複雑な「四つ巴の抗争」の構図にするために考え出したのが、チャイニーズマフィア VS 日本人ヤクザの抗争。

チャイニーズマフィア赤竜会のボスがウォン（バート・クウォーク）で、映画の冒頭ウォンのアジトにある超高層ビルから赤竜会のシンボルである赤竜像が、ストリートギャングのキエンとツによって盗まれるシーンが登場する。当然ウォンにしてみれば、それを許すことができず、ここから報復作戦が開始……。

他方、ストリートギャングに赤竜像の奪取を命じたのが日本人ヤクザのボス、キタノ（サンティ・スダロ）だが、なぜかキエンとツの2人はその奪取が失敗

に終わったとインチキな報告したから話はややこしいことに……。

もう1つの対立は……？

チャイニーズマフィアと日本人ヤクザの対立は、いつか大戦争になるのは必至だが、もう1つの対立は誤解にもとづくもの……？ すなわち、レオがバンコクに開くジムは、子供たちに「YAMAKASI」的技術を教えるもので、何ら違法性のないもの。

ところが、ローガンらが建設中のビルでトレーニングを始めた時、いきなり彼らを襲ったのがキエンとツそしてその部下のストリートギャング団。これは、キエンが「YAMAKASI」たちがチャイニーズマフィアに雇われ、報復のためにバンコクにやってきたものと誤解したため。

したがって、この対立はその誤解さえ解ければ解消するものだったが、誤解が誤解を生む中、さまざまな行き違いが生まれ、遂に闘いの中でローガンは死亡……。そんな中、結局はチャイニーズマフィア VS 日本人ヤクザの抗争に巻き込まれてしまった「YAMAKASI」たちやキエンとツたちの行き着く先は……？ そして、彼らの闘うべき相手は……？

日本人観やヤクザ観はこの程度……？

『パール・ハーバー』（01年）での日本軍の戦争指導部の描き方はひどすぎたが、日本大好き人間であるタランティーノ監督の『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（03年）でも、日本人ヤクザの描き方はかなり偏見に満ちたもの……。また、パロディの傑作『日本以外全部沈没』（06年）でも、日本にやって来たオスカー俳優が語る日本観は、「フジヤマ、芸者、寿司、ハラ切り」というきわめて断片的で偏見に満ちたもの……。強固な日米同盟を誇る同盟国アメリカですらこの程度の理解なのだから、遠いヨーロッパの国フランスにおける日本観やヤクザ観なんて知れたもので、ヤクザは日本刀を振り回し、やたらハラを切っているとも思っているかのよう……？

そう考えなければ、わざわざ銃を置き、刀を抜いて暴れ回る組員たちの姿や、えらく潔く敗北を認めて日本刀を自らの腹に突き刺してあっさりと自殺（これが

フランス人の見るハラ切り……?) してしまうキタノの姿など理解することができないのでは……?

ドタバタ全面戦争のクライマックスはちょっと……?

映画前半は「YAMAKASI」の超人(鳥人)的アクションに息を呑むことまちがいなし。さらに、「YAMAKASI」とストリートギャングとの間で展開される、建設中のビルの側壁面の竹の足場を戦場(?)とした闘いの面白さにも酔いしれるはず。ここらあたりは「YAMAKASI」本来の腕の見せどころ……。

ところが、次第にさまざまな対立軸が整理され、最後の全面戦争のシーンになると、チャイニーズマフィア VS 日本人ヤクザとの大集団による日本刀での斬り合いに「YAMAKASI」グループとキエンとツが合流して三つ巴の闘いとなる。これがこの映画のハイライトとして設定されているのだが、ここまでハチャメチャなドタバタ・アクションを見せられると、あまりにもマンガ的・劇画的になってしまい、逆に魅力半減……?

しかもあれだけの人数が日本刀を振り回しているながら、どこからも血しぶきがあがってこないのは、集団アクションとして大きな欠陥では……? さらに、背中を斬られこれはヤバイと思ったキエンも、なぜかその後再び元気に……? いくら大衆娯楽アクションといっても、これではちょっと……?

2006(平成18)年8月28日記